



通信



VOL.18

令和3年2月1日

作成：長岡 正宏

相手の瞳に映る自分を想像して稽古しよう！

道心探求

前回、気を合わせるということについて書いたが、今回は「結び」だ。あるものと、あるものを繋げることを「結び」という。合気道では相手と結ぶこと、すなわち「結び」が重要である。「結び」の原語は「ムスビ」からきていると云われている。ムスビのムスは息子、娘の「ムス」と同じだ。ムスは産す(ムス)からきている。つまり、ムスは産む、生み出すという意味である。すなわち「あるもの」とあるものを繋げて「生み出す」ということである。男と女が結ばれて、息子・娘が生まれるのである。「ムスビ」のヒは、「霊(ヒ)」からきている。人(ヒト)のヒも霊(ヒ)からきているという説がある。では、霊(ヒ)とは何か？というところ、霊妙なる力・神霊のことだ。現代の我々には理解しがたいかもしれない。「結び」を直訳すると、あるもの」とあるものを繋げて「霊妙なる力を生み出す」ということになる。

気を合わせて和合し結ぶことは、単に相手の動作に合わせるのではなく、相手と新たに何かを生み出すことに他ならない。何かを生み出すとは、「合気道」のことである。感の良い合気道家は、ここでもう気づかされたら。武産(タケムス)だ。開祖のいう「武産合気(タケムスアイキ)」は、合気を次々と生み出していくということにならないだろうか。相手がこう来たら、こうするという単なる武術的な技のことではなく、それらをはるかに超越した世界ではないだろうか。多田師範が講習会で「強くなるためではなく、生命力を高めるために皆合気道をやっていた」と、しばしば話されていたことを思い出す。多田師範の呼吸法を見てみると納得する。合気道には、単なる力や技では説明できない魅力がたくさんあることはお分かりだろう。それも「結び」からきているのかもしれない。

開祖は、今というオーラが凄かったそうだ。相手が何人いようが関係なかった。全ての人と結んだのである。また、剣を持っては杖と結び、杖を持っては杖と結ぶ。そして、開祖は最晩年、合気道を昇華させ極致ともいえる「合気神楽舞」を披露されていた。おそらく開祖は、「神(宇宙)」と結ばれていたであろう。

【意識して息をしよう】

「水平の呼吸法」(天の鳥船の行ではない)
一本の線上に右半身で立つ。両手を腰骨につけて手を軽く握る。息を吐きながら手を開き、腕を前へ伸ばしていく。伸ばしきったら、次に息を吸いながら手を元の位置へ戻し軽く握る。息は腹式呼吸で止めない。10回行ったら同じように左半身でも行う。(ワンポイントアドバイス参照)

(正面) ①



②



③



④



⑤



(横) ①



②



③



④



⑤



～ワンポイントアドバイス～



息を吐きながら、右上写真のように緩やかな弧を描くように腕を振り出す。次に息を吸いながら胸を広げるように意識して左上写真のように弧を描いて腕を元に戻す。
決して腕の動きを直線にはいけぬ。慣れてきたら自分の重心を自覚するようにしよう。
動作・呼吸・重心が一体になるように呼吸法を行えば、技は格段に上達するだろう。

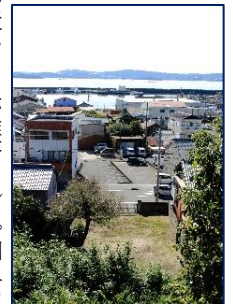


熊野権現



熊野権現前に立つ開祖

合気の旅(開祖の生家跡②)
開祖が幼い頃好んで遊んだといわれる生家跡の裏山にある熊野権現へ上ってみた。下の写真下方の空き地が生家跡になる。かなり海に近いことが分かる。道の形状や古い建物の残存から、昔はもつと海が近いことが推察される。開祖の父与六は怪力であったという。腺病質で夢想がちだった開祖が心身強健な少年に変貌していったのは、父与六の躰かたにあったようである。怪力だった父はわざと開祖の前で米俵をひょいと担いで見せたり、朝早く近所の祠めぐりに同行させたり、夜浜に連れ出して漁師の子と相撲をとらせたりしたと「植芝盛平伝」にある。生家跡付近の路地を歩いていて、開祖もこの辺りを行き来したのかもしれないと思ったら非常にワクワクした。



～開祖の言葉

この道は全部、天に学び、地に学び、宇宙の中心に結んで、また、我々は宇宙とともに進んで、その上に自己の息で全部結ぶことをやり遂げていくのであります。

「合気神髓」より

